

光村 三年下
モチモチの木 授業計画(計八時間)

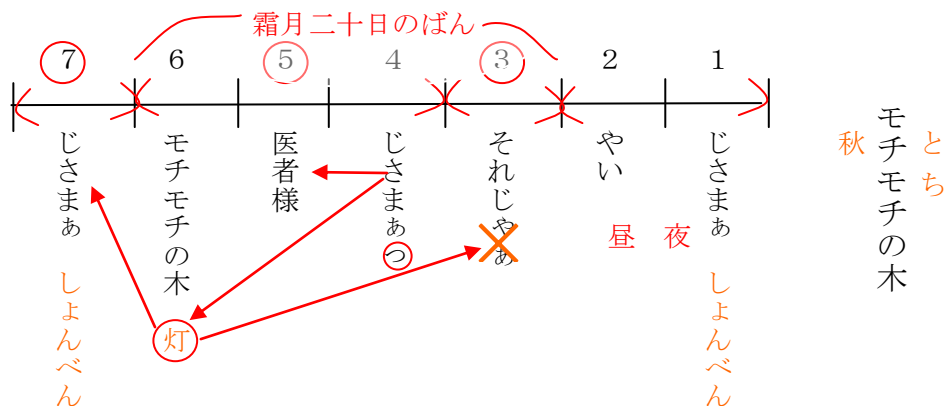
目標 絵本を味わい、斎藤隆介の作品に親しむ。

- 第一次指導(概観の指導) 一時間
- 第二次指導(詳しく読む) 三時間
- 第三次指導(漢字・語句指導) 一時間
- 第四次指導(感想文の指導) 二時間
- 第五次指導(斎藤隆介の作品) 一時間

第一次指導(話を整理し、話の山を探す)

- ◎ 区画 豆太は見たを三区画 計七区画(指示)
- 一 よむ(席順 区画 音読 七名)
- 二 とく(読後感の整理の話し合い)
- 題目(題から話の輪郭を明らかにする)
- ・モチモチの木と豆太像(絵を手掛りに)
- ◎ ひびき(印象の強いところを話し合う)
- ・豆太の目↓挿絵↓登場人物と粗筋
- 手引き(書き出す言葉の指示)
- ・豆太の言葉(最初の一語を書き出す)
- 三 よむ(手引きに従い黙読)
- かく(選んだ語句を視写 師は板書)
- 四 よむ(板書を全員で指黙読・指音読)
- 五 とく(板書事項をもとに話し合う)
- 六 ○ 事実(板書事項を関連付ける)
- ・3つの「じさま」↓小便↓医者
- 区分(霜月二十日の晩と前・後)
- ◎ 霜月二十日の晩を二区分
- ・山(詳しく読んでいくところの発見)
- ・豆太が山の神様の祭がみられた木
- あきらめた豆太と見た後のじさま
- 余韻 豆太を見守るじさまの温かさ
- 七 よむ(全員で板書を指音読)

〔板書事項〕



第二次指導第一時(山の①を詳しく読む)

- 一 よむ(七名 音読)
- 二 とく(前時の復習と本時に繋ぐ話し合い)
- おさらい
- ・豆太が灯を見たのは何番↓各区画へ
- ◎ 承接
- ・霜月の二十日の晩のじさまの話
- 手引き
- ・じさまの話を聞いた豆太の様子
- 三 よむ(指示された部分を黙読)
- かく(三よむと同時に視写)
- 四 よむ(全員で板書を指黙読、指音読)
- 五 とく(板書された文章について話し合う)
- 語義(意味や働きの難しい語句)・区分
- ・「それじゃあ」だけでもだつてけど
- ・「こんなそれも たつた」とんでもねえ
- ・「言ったところとその訳に二区分
- ・「」の中二区分 訳の部分二区分
- ◎ 心(文章の核心を話し合い、味わう)
- 声(大きさと質)
- だめだ!!とんでもねえ話↓四つを確認
- なきそう↓じさまもおとうも見たんだ
- 夢みてえな美しさ↓悔しい!!なきそう
- 余韻 (五歳の豆太の気持ち分かるよなあ)
- 七 よむ(全員で板書を指音読)

〔板書事項〕

7 6 5 4 3 2 1
~~じー~~ ~~モー~~ 医 じー 3 2 1
~~ー~~ ~~ー~~ ~~ー~~ ~~ー~~ ~~ー~~ ~~ー~~ ~~ー~~

うしみつ 一人の子ー 勇気ー

①②③④

「ーそれじゃあ、おらは、
 とつてもためだ。」

豆太は、ちっちゃい声で、

なきそうに言った。

だって、じさまもおとうも

見たんなら、**自分も見た**

かったけど、**①こんな冬**

真夜中に、モチモチの木を、

それも、**④** たった一人で見

出るなんて、**②** **とんでもねえ**

話だ。**ぶるぶるだ。**

第二次指導第二時（山の②を詳しく読む）

一 よむ（七名 音読）
 二 とく（前時の復習と本時に繋ぐ話し合い）

○ おさらい

・ じさまの話聞いた豆太の様子

・ 山の神様の祭りをあきらめた豆太は。

◎ 承接

・ 宵の口に寝た豆太が目覚めたのは。

○ 手引き

・ 豆太が走っている様子を想像して…。

三 よむ（指示された部分を黙読）

四 かく（三よむと同時に視写）

五 よむ（全員で板書を指黙読、指音読）

六 とく（板書された文章について話し合う）

○ 語義・区分

・ まんま 半道もある—— すごい星

・ 霜 かみついた 足からは からのあ

・ 各段落を二区分 二段落目を二区分

・ 心（文章の核心を話し合い、味わう）

・ 空、道の様子と豆太の姿↑語り手の心

○ 余韻（美しい夜空の下を一人走る豆太…）

七 よむ（全員で板書を指音読）

〔板書事項〕

× 自分も

①冬

②真ー

③モー

④ー

ぶるぶるだ

② ねまきのまんま。

① はだしで。③ 半道もある

ふもとの村まで——。

外はすごい星で、月も

出ていた。③ とうげの下り

の坂道は、一面の真っ白い

霜で、② 雪みたいだった。」

霜が足にかみついた。

① 足からは血が出た。

豆太は、なきなき走った。」

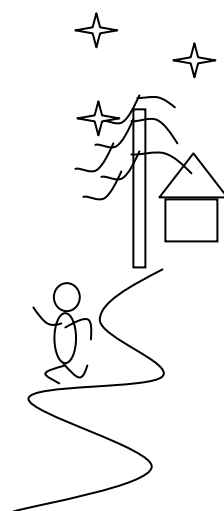
① いたくて、② 寒くて、

③ こわかったからなあ。

第二次指導第三時（山の③を詳しく読む）

- 一 よむ（七名 音読）
- 二 とく（前時の復習と本時に繋ぐ話し合い）
 - おさらい
 - ・ 峠の道を走り下る豆太（略画を描きながら）
 - ・ その様子が語り手の目にはどう見えた。
 - ◎ 承接
 - ・ 医者と引き返す豆太の様子と見たもの。
 - 手引き
 - ・ じさまが豆太に伝えたいことを考えながら、じさまの話のおまえから後を書く。
- 三 よむ（指示された部分を黙読）
- 四 かく（三よむと同時に視写）
- 五 よむ（全員で板書を指黙読、指音読）
- 六 とく（板書された文章について話し合う）
 - 語義・区分
 - ・ おまえ ほど だったんだな あれば
 - ・ きつと それを びつくらする わけよ
 - ・ 二区分後それぞれを二区分
 - ・ 心（文章の核心を話し合い、味わう）
 - ・ 豆太に伝えたかったことは、何か。
 - ・ 豆太を見るじさまの喜びと優しさ。
 - 余韻（優しい二人だなあ。）
- 七 よむ（全員で板書を指音読）

（板書事項）

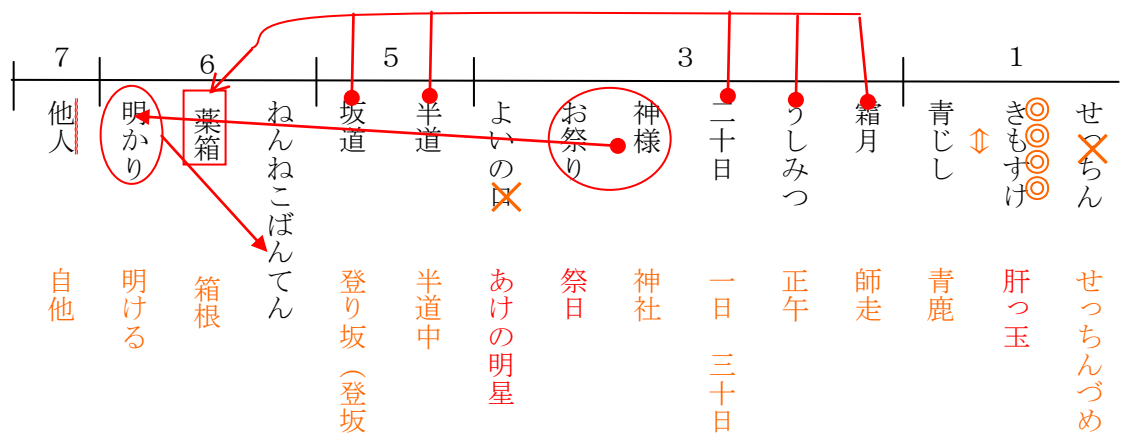


豆太
おまえは、一人で、夜道を
医者様呼びに行けるほど、
勇氣のある子どもだったん
だからな。自分で自分を
弱々だなんて思うな。
人間、やさしささえあれば、
やらなきゃならねえことは、
きつとやるもんだ。それを
見て、他人がびつくらする
わけよ。は、は、は。」

第三次指導（難語句、漢字等）

- 一 よむ（七名 音読）
- 二 とく（前時の復習と本時に繋ぐ話し合い）
 - おさらい
 - ・ じさまが、笑ったのはどうしてか。
 - ◎ 承接
 - ・ その後、豆太は、どうなったか。
 - 手引き
 - ・ この話の面白いところを考えながら、脚に書いてある言葉を書き出す。
- 三 よむ（指示された部分を黙読）
- 四 かく（三よむと同時に視写）
- 五 よむ（全員で板書を指黙読、指音読）
- 六 とく（板書された文章について話し合う）
 - 文中の位置
 - ・ 2、4区画の語句はないが、分けると。
 - ・ こもる力（文中での語句の働きを考える）
 - ・ じさまの願いが、叶った言葉は、どれ。
 - ・ 二区分後それぞれを二区分
 - ・ 豆太を見るじさまの喜びと優しさ。
 - △裏▽
 - ・ 語彙を広げる活動を少し。
 - （板書事項 例示 三つ四つ扱う）
 - 余韻（優しい二人だなあ。）
- 七 よむ（全員で板書を指音読）

〔板書事項〕



第四次指導第一時 (感想文記述)

- 一 文話 (作文の準備の話)
 - (感想文なので 一 よむ)
 - 読んでみたい人 (前日に決めておく)
 - 会話のところが地の文のところで分担を分ける。

- 二 文題発表 (前日に予告しておく)
 - (この物語を一・二年生紹介する。)
 - 豆太 じさま 医者様 おとう
 - モチモチの木 絵 印象に残ったこと
 - 四、五名に発表させる。

- 三 記述 (二十分程度で 原稿用紙一枚程度)
 - (消しゴムは使わないで、集中して書かせる)

- 四 自己批評 (各自読み直して加除訂正)
 - (最後に日付を書かせる。)

- 五 提出 (表を上にして半分に折って提出)

* 作文指導の方法で、感想文の指導を考えました。作文を月二回くらいは、書かせたいと考えています。すると、週一時間、作文の時間を設けることとなります。(記述と批評を隔週で)年間指導計画に難しい面もありましようが、自分の考えを綴る時間は、人間的な成長という面からも重要だと思えます。工夫してみたいですね。

第四次指導第二時 (感想文批評)

- 一 総評 (感想文を読んだの全体の感想)
 - ・ クラス全体の長所を中心に話す。
 - ・ (発想法 視点 心情 共鳴 書きぶり 漢字 丁寧さ 等々すべての面から)
 - ・ 次の参考に、題・内容を分類して示す。
 - ・ 記述上の課題を一点示し、修正する。
- 二 個評 (個別に作品の内容を話す)
 - ・ 四、五名の作品を紹介する。(意欲を高めるための紹介である。力の弱い子を中心に、力のある子の作品も入れながら、第一読者であり、熱烈なファンでもある担任が、楽しく読んだことを伝える。)
 - ・ 優良文朗読 (作者に読ませる)
 - ・ 三作品くらいを読ませて、担任のコメントをちよつとつける。

- 三 批正文聴写 (教師は板書、児童は聴写)
 - ・ 十五程度で終われるような作品を選び、ゆつくりと読んでいく。句読点等も行がえも伝えながら読んでいく。児童には、聞いて書ける漢字は使ってよいことも話しておく。最初は、三分の一位の児童が聴写できないが、書けるところまでよい。回数を重ねると書けるようになる。

- 四 細評 (聴写文の長所を話し合う)
 - ・ 作者に音読させてから、長所を考える。
 - ・ 作者に自信と意欲を、他の子は次回の参考になる点を考えさせる。
 - ・ 教師のコメントも一言加える。

* 一時間で十五名程度しか扱えないので、作文の時間ごとに配慮しながら進める。